# 共助の取り組み不可欠

## 狭い路地 消火難しい
## 指定避難所 広くない

避難の課題と日頃の備えを話し合う震災の被災者、地元住民、保育関係者ら。消防業界は消火活動時の問題点を説明した

東京都文京区大塚6丁目に、狭い路地が入り組む木造住宅の密集地域で、都の被害想定の火災危険度が最も高い。地震で家屋倒壊や同時多発的な火災が発生した場合、避難ルート確保や消火が大きな課題となる。

地区の学童保育設置「大塚育成室」

### ワークショップ

を初めて実施するケアマネジャー青木規子さん（42）は「ブロック塀が壊れたり、火事になったりしたら、子どもたちはどこを歩いて逃げたらいいんだろう」と表情を曇らせた。

軽トラックが止まっていたり、工事をしていたりするだけで通れないなど道幅が狭い箇所もある。

地元の小石川消防署の高橋龍雄署長補佐は、消防車はまず入ってこられないホースを相当伸ばして消火することになり、かなり困難な活動になる」と懸念した。

指定避難所の青柳小にたどり着くことが難しい場合の対策も話し合った。

豊島区巣鴨町会会長の鎌田邦彦さん（71）は「4町会の6900人が避難対象だが、青柳小には1000人もいるはずないだろう。別の広大なスペースを近くにあるはず。少なくても最低3日間は過ごすことはないと」と述べ、近隣の地域や寺院の協力を求める必要を唱えた。

### 火災避難含め地震対策を

東京むすび塾の避難訓練で、保育園児と住民は木造住宅密集地の路地を通り、避難場所へと回かった。道幅は特自動車1台がやっと通れるほどの狭さ。大地震の後、障害物や火の手が進路を塞ぐ光景を想像せずにはいられなかった。

訓練後の振り返りでは、参加者が「塀や建物が倒れたり、火災発生したりした場合の避難の課題を共有した。津波の心配がない隣部の場合台に、初期消火が火災による被害の軽減につながることも確認した。

1978年の宮城県中地震に、倒れた塀の下敷きになって犠牲者が出た。95年の阪神大震災は、瓦礫や家屋の倒壊に次ぐ死者が多く、多くの人命を奪った。

東日本大震災では2万8000人余りの死者・行方不明者のほとんどが津波の犠牲だったため、震災後の得られた教訓は自分が生きていくためには、「自然災害は常に姿を変えて地域を襲う。「災害機会を出さないため自分の命を守る」という毎日本大震災の教訓を、地の思いを込めに、首都直下地震の被災予想地域の住民が防災意識を高めることは大きい。

被災地だけでなく、それ以外の自然災害の教訓に立ち返り、揺れ（の消え、火災の初期対応と避難を含めた総合的な地震対策に向き合う必要があることを確認する機会になった。

（報道部・須藤直隆）

### 東京新聞 こう伝えた

東京都文京区大塚6丁目で開催した巡回ワークショップ「むすび塾」と避難訓練は、東京新聞と共催した。防災・減災の浸透を図るため、東京新聞は5～7日に連載記事を掲載。東日本大震災の被災者が講演した「東日本大震災を忘れない～被災体験を聞く会」を特集したほか、地震と火災を想定した避難訓練とワークショップの話し合いの様子を詳しく報じた。地域の課題と備えを住民と一緒に探った紙面の一部を紹介する。

## 東日本大震災の語り部から

### 地域の結びつき 命守る

元保育所長　林　小春さん（63）＝気仙沼市

震災時、海に近い気仙沼市の一景保育所の所長だった。0歳児を含め乳幼児計人が保育していた。

職員は女性ばかりだったが、近くの水産加工会社の男性社員の手も借りて気仙沼中央公民館に避難した。6、7日の津波の足元に迫られた。生後間もない赤ちゃんにガムシロップをあげた。指から流れたら吸い付いて離さなかった。身震いするほどの生きる力をもらった。

寒さに震えながら2日間過ごした。九死に一生を得たのは、「周囲からの地域との結びつきのおかげ。津波避難訓練は、住民や事業所にも参加してもらっていた。子どもたちを守ろうという雰囲気が生まれ、ぎりぎりの状態で助かった」と話した。

### 訓練重ね判断力養って

佐藤　誠悦さん（63）＝気仙沼市

気仙沼消防署の指揮隊長として震災時、津波災害の現場に出動したが、津波で妻を亡くした。消防の同僚10人も殉職した。二度と災害で犠牲者を出したくない思いで、命や地域を守る教訓を後世に伝えている。

学校や保育園での災害対応は、リーダーである先生たちの初動や判断力が重要になる。避難先で危険を感じた場合、いち早く次の避難場所を確保できるような判断力を、防災訓練で養ってほしい。

火災避難も大事だが、まず地震発生時に自分の命を自ら守る行動が必要。それが救助・消火、避難支援につながる。大地震はあすにも発生する可能性がある。訓練を繰り返しながら、命を守る究極を早く模索してほしい。

## 東日本大震災の語り部から

### 女性リーダー育てよう

福住町内会長　菅原　康雄さん（67）＝仙台市宮城野区

福住町内会は約400世帯、1000人余が加盟し、地域を挙げて減災に取り組んできた。マンションなどが多くなり、「自分たちのことは自分たちで守る」ことを目標としている。日ごろの近所づきあいを深めることがポイントだ。

災害に備えるため約作成した「地震・関する地域安全度定調査」によると、避難・消火などの活動さを考慮した次大震度で、大塚6丁目は最高ランクの「5」と判定された。

地域の大人が震災の手をとって避難したり、もっと声を掛け合ったりする訓練も必要だろう。

災害に備えるため、地域住民のつながりを深めるべきだ。保育園が地域の防災センターとなる交流すれば、連携の機能が広がる。家庭の防災意識の品評会をしたり、非常食をみんなで食べたりする地域イベントがあってもいい。楽しくできることから始めてほしい。

### 訓練重ね判断力養って

佐藤　誠悦さん（63）＝気仙沼市

気仙沼消防署の指揮隊長として震災時、津波災害の現場に出動したが、津波で妻を亡くした。消防の同僚10人も殉職した。二度と災害で犠牲者を出したくない思いで、命や地域を守る教訓を後世に伝えている。

学校や保育園での災害対応は、リーダーである先生たちの初動や判断力が重要になる。避難先で危険を感じた場合、いち早く次の避難場所を確保できるような判断力を、防災訓練で養ってほしい。

火災避難も大事だが、まず地震発生時に自分の命を自ら守る行動が必要。それが救助・消火、避難支援につながる。大地震はあすにも発生する可能性がある。訓練を繰り返しながら、命を守る究極を早く模索してほしい。

### 隣近所の声掛けが大切



榊　美紗子さん（26）＝石巻市

律波で想定と高視を、でも、一人残された、5分ぐらいの津波に流されたが、軽い負けで済んだ。

約2000世帯の住宅が密集している地区だった。家から海まで800メートルがなかったが、直接、海は見えず、津波が迫っていることに気付かなかった。

ヒキメ分からなかった。

周りの人が避難を始めても、家族は「ここまで津波は来ないから大丈夫」と逃げなかった。無理に引っ張ってでも逃げていれば、後悔している。心に残った大きな教訓になっている。

「津波が来たから逃げろ」と、もっと地域全体で声掛けしていたのではないか。隣近所のコミュニケーションの大切さを感じた。

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に、地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

次回の「むすび塾」は29日、宮城県美里町の駅東行政区で開催します。

## 東京新聞と共催　@東京・文京区大塚6丁目

むすび塾

# 避難を妨げる路地や塀

### 木造密集地での火災想定

東京都文京区大塚6丁目で実施した避難訓練では、地元の大塚保育園の園児や町内会役員ら50人が、木造住宅密集地での火災避難の課題を確認した。参加者は予定する避難ルートが火災で通行できない場合（うかい）など安全な場所を目指した。

午前9時、東京消防庁部を震源とするグニチュード7・3、震度6弱の首都直下地震が発生し、同時多発的に火災が起きたとの想定で訓練を実施した。

大塚保育園では、年長の園児14人がテーブルトを囲み、地震から身を守った。教諭後、町内会役員の「火災発生、延焼の危険性がある」とのかけ声を合図に、園児たちや保育士は地域住民とともに避難した。

保育園を出発し、予定のルートを進むと、地域住民から「火災発生、通行止め」との声がかかった。園児たちは住民らに誘導されながら、車が通れないほどの狭い住宅路を約10分かけて避難し、避難先になりついた。

参加者は道幅の狭さや、ブロック塀や石塀が倒れた際の避難の難しさを実感した様子だった。大塚保育園の寺尾章子園長53は「災害時に通れない場所もあることを想定し、訓練しなければならないと思った」と振り返った。

地域住民は訓練後、「火災の際に備える防、ハンカチなどを用意する必要もある」、「普段1日の道路を想定し、飲料水の備えも必要ではないか」などと意見を交わした。

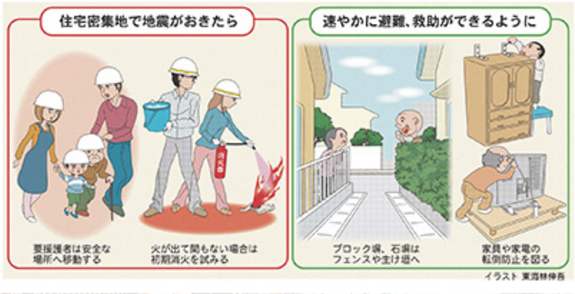
### 消防車 通れない道も

東京都文京区大塚6丁目は区の北西部に位置し、豊島区と接する。近隣に豊島サンシャイン60がある住宅地で、7月1日現在、2290世帯1世帯381人が暮らす。

首都直下地震の発生時に火災の発生が指摘されている。木造住宅が密集し、消防車が通れないくらい道路の幅も狭いた約で、築30年以上の住宅も多い。

都がまとめ3年に公表した「地震に関する地域安全度定調査」によると、避難・消火などの活動さを考慮した次大震度で、大塚6丁目は最高ランクの「5」と判定された。

園児たちは身を守る行動をとった後、ヘルメットをかぶり、狭い路地を通って避難場所に向かった



■むすび塾に参加して

【訓練を終えて】ブロック塀や狭い路地が多く、訓練した住宅。かい路を実際に歩くなか不安だ。今回の経験を生かしたい

＝大塚坂下南町会防災委員・曲木英一さん（55）

【災害時の備え】救急救命士による講習会の開催や消火器の設置など自治会の点検など手近なことから実践に取り組みたい

＝豊島ケ岡町会会長・鎌田邦彦さん（71）

【訓練を終えて】地域の道がとても狭いと感じた。園児たちに、災害時に自分の身を自ら守る方法を教えたい

＝大塚保育園長・寺尾章子さん（53）

【参加して】区内を歩いたり、きょうの訓練を区の防災に反映させたい

＝区防災課主査・岡村良二さん（40）

【訓練を終えて】保育園では0歳児も預かっている。さまざまな想定で訓練をしなくてはいけない

＝区立保育園園長会防災担当・鈴木八重子さん（60）

【参加して】訓練を通じ話し合いは防災を考えるいい機会になった。避難訓練や祭りを継続することで助け合える関係を築きたい

＝大塚坂下北町会副会長・川端好枝さん（73）

【参加して】大人が逃げ方を急命に考えるべき。子ども、高齢がなければ難しい。自助という意識を教えたい

＝大塚育成室保護者・青木規子さん（42）

【参加して】東日本大震災では、岩手県大槌町で義捐金をしてした。震災を絶えず思い出しながら、分かっていること、できることから伝えたい＝幕間小副校長・土屋雅子さん（59）



明治大大学院教授
元東京都副知事　青山　佾（やすし）さん

### 住民同士助け合おう

関東大震災では、大規模な火災出た。首都直下地震でも、消防が対応しきれない程の火災が起きる可能性がある。火災避難を前提に、日ごろから住民同士が地域で助け合うことが大切だ。

災害時の避難の仕組みは年、おろそかになっていると感じる。2013年の39人が死亡、行方不明となった伊豆大島の土石流災害では、行政が避難勧告を出さなかった。今回の訓練は、住民が住宅密集地の怖さを実感し、自ら避難行動を考え直すよいきっかけになった。

減災・復興支援機構専務理事　宮下　加奈さん

### 園児誘導に課題残す

大規災害の発生時は、警察や消防が道路を通行しにくくなる。今回の訓練では、地域住民がもっと臨機的に子どもたちの避難を先導してもよかった。今後は地域の大人が園児の手をとって避難したり、もっと声を掛け合ったりする訓練も必要だろう。

災害に備えるため、地域住民のつながりを深めるべきだ。保育園が地域の防災センターとなる交流すれば、連携の機能が広がる。家庭の防災意識の品評会をしたり、非常食をみんなで食べたりする地域イベントがあってもいい。楽しくできることから始めてほしい。

■専門家から



減災・復興支援機構理事長　木村　拓郎さん

### いち早く状況把握を

律波と火災の共通点は、地上からは状況がよく分からないことだ。広域的な情報がないと逃れて逃げ遅れてしまう危険性がある。

20年前の阪神大震災の教訓を踏まえて、狭い道路が多い大塚地区の道路は難しい。子どもや高齢者らが安全な場所へ移動する。

火災は初期消火が重要だ。東日本大震災ではコンロや暖房器具に物が落ち、燃え広がったケースが地震でも火災が発生になった。消火器がなければ、牛乳やしょうゆなど身近な物も消火に使える。機転を利かし、火が小さいうちに消すことを心掛けて欲しい。